日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)関東

文は信なり

第３８号2018年クリスマス号

発行責任者
三浦喜代子（代表）
事務局
〒131-0043 墨田区
立花 4-6-13
TEL&FAX
03-3616-8621
郵便振替
00170-0-61838
HP:http://jcp.daa/

【目次】P1～2 駒田隆　P3 臼井淳一　P4 志田雅美・槇尚子　P5 山本披露武・富岡国広　P6 西山純子　P7 三浦喜代子　P8 篠田一志・土筆文香(P8~9)　P10 菊池洋子・安東奈穂美(P10~12)　P12 佐藤晶子・島本耀子　P13~14 長谷川和子　P14　ＪＣＰの紹介

明治のキリスト教（一）

駒田　隆

（一）

徳川幕府の末期、慶応三年四月、外国人が日本にキリシタン上陸し、彼らのために教会堂が建設された時、浦上（長崎県）のいわゆる「かくれキリシタン」たちは、天主堂の聖母マリア像を見つけて、大喜びをしました。そして信者の葬式の時に、従来キリシタン禁制下のため行っていた仏式の葬儀を断り、自葬しました。そのために、いわゆる「浦上四番崩れ」が起こり、キリシタン禁制に反するとして、三三九四名が逮捕されて、二〇藩に預けられ、厳しい取り調べが行われました。そのため、諸外国は、このことについて激しく抗議しましたが、幕府は、御禁制破りである、として一蹴しました。

翌年、幕府は崩壊して明治新政府が樹立されましたが、新政府もまた、神道国家主義のもと、キリスト教は邪教である、として従来の幕府の方針を踏襲しました。明治政府は、幕府と諸外国が結んだ条約を不平等であるとして改正したい、と思っていたのですが、諸外国は、この「浦上四番崩れ」の原因である「キリシタン禁制」を見て拒否しました。新政府は止むを得ず、明治六年二月に、「切支丹禁制」の高札は、「一般熟知のことにつき取り除くべき事」としてすでに国民が熟知しているからという理由でこの高札を除去しました。

すなわち、キリスト教信仰が自由になったのではなく、「切支丹禁制」はみんなが知っているから今さら高札を立てる必要がない、としたのです。それは、キリスト教信仰を認めたのではなく、黙認という形であったのです。その証拠に、明治一七年まで、人々の葬儀は神仏いずれかの方法によることを、義務付けています。

キリスト教の日本伝道は、それまでは、主としてカトリックが中心でしたが、開国に伴って、プロテスタント、ギリシア正教会、聖公会なども参加するようになりました。これを受け入れた日本人もまた、その多くが青年であり、また、どちらかといえば、植村正久（旗本）、本多庸一（津軽）、押川方義（伊予松山）など旧佐幕派が多かった、と言われます。

伝道に使われた聖書は、最初は伝道者の個人訳が使われていましたが、イギリスの『欽定訳聖書』を基本にして、明治二一年に、いわゆる、『明治訳（元訳）』と言われる、旧新約聖書が発行されています。ただ、カトリックでは、礼拝用語の違いから別に訳され、ローマ・カトリックのラゲ訳、正教会のニコライ訳があります。

讃美歌については、幕末に伝道が再開された時に、信徒用に、『きりしたんのうたひ』（歌のみ二二、曲はない）が明治一一年に発行されたのが、日本のカトリック教会の最初の讃美歌集と言われます。日本で最初に歌われた讃美歌は、明治政府

のスパイが教会の礼拝に参加して得た資料（明治五年）によれば、「エスワレヲ愛シマス（主われを愛す＊讃美歌四六一）と「ヨイ土地アリマス（あまつみくには＊讃美歌四九〇）」でした（ただし、歌詞は現行のものとは異なる。「主われを愛す」→「エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス、彼レニ子供中、信スレハ属ス、ハイエス愛ス、サウ申ス」）。この二曲は、いわゆるヨナ抜き五音階で日本人にはなじみやすい曲だった、と言われます。

その後、各教派によって様々な『讃美歌集』が出版されています。合同による讃美歌集も検討されましたが、なかなか実現されず、その中で生まれたのが、『新鮮讃美歌』（歌詞版・明治二一年、楽譜版・明治二三年。二六三曲）です。二六三曲のうち、九一曲は日本人による創作です。当時の詩人島崎藤村、蒲原有明などは、この讃美歌集に触発された、と言われます。その後、各教派共通の讃美歌集の作成が検討され、三年間の検討の結果、明治三六年になって、四八五曲を集めた『讃美歌』が出版されました。

（二）

明治時代では、青年たちの積極的な受洗が幾つかありましたが、明治五年三月に、バラ宣教師に指導さていた、植村正久、伊達梶之助、押川方義らの受洗、いわゆる「横浜バンド」があり、彼らによる日本最初のプロテスタント教会である、「日本基督公会」が横浜に設立されました。そして、明治九年一月には、熊本洋学校のジョーンズ師の指導による、宮川経緯、金森通倫、海老名弾正、徳富猪一郎ら三五名による「熊本バンド」の結成（彼らはのちに同志社に入学）、札幌農学校のクラーク教頭の指導による、同農学校一期生一六名全員による「札幌バンド」の「イエスを信ずる者の誓約」があり、同校の二期生新渡戸稲造、宮部金吾、内村鑑三ら一五名も署名しています。

また、聖書が、当時の文学、思想にも大きな影響を与えた、と言われます。もっともそれは、キリスト教本来の思想というよりも、キリスト教に触発されたロマンチシズムという面で取られており、夏目漱石、有島武郎、鈴木大拙、西田幾太郎らにその影響が見られるとも言われます。

（三）

天皇制国家の確立を目指していた政府は、明治二二年二月一一日、『大日本帝國憲法』が公布しました。その、第二八条にはこうありました。

第二八条　日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タルノ義務ニ背カサル限リニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

現在の『日本国憲法・第二〇条』にある、「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。」と比較しますと、大きな相違がみられます。それでも、教会関係者は、祝賀会までして歓迎しました。キリスト教信仰が、公認されたのですから。しかし、翌年一〇月に、『教育勅語』が公布され、倫理上の締め付けは、かえって厳しくなり、旧制一高における、「教育勅語奉戴式」における、内村鑑三の勅語への拝礼拒否事件を契機に、「忠君愛国」が国民の義務のようになりました。

キリスト教関係学校への締め付けは厳しくなり、内村鑑三は、やがて独立して『聖書乃研究』誌を中心に活動しました。ただ、彼のいわゆる「無教会」の「無」とは、既存教会を無視する、という意味ではなく、「教会」のない者の「無」であったことです。そして、彼の望んだ「教会」とは、「愛に満ちた」教会であり、彼から見れば、当時の教会は、その条件に合致していなかったのです。彼は、『マタイによる福音書』二三章一五節を引用して当時の教会活動を批判しています。

このころの日本の教会の流れは、聖書一辺倒的な神学（聖書を唯一無謬の啓示の書とする見解）を中心とする教会活動が中心でしたが、明治二〇年末に、「聖書無謬・三位一体・原罪を認めない」アメリカのユニテリアン協会が来日し、四年後に、東京自由神学校を開校し、「「キリスト教の本質はイエスの教訓とその人格にある」と、いわゆる「新神学」を主張し、その考えが組合教会系の海老名弾正、小崎弘道、金森通倫、横井時雄などに多大な影響を与えました。

つづく

煌めくクリスマス

臼井淳一

私が、第一の希望であり、第二の希望でもあり第三の希望であった神奈川県立小田原高等学校に入学したのは昭和三二年（一六歳）の春であった。輝く栄冠を手にし、春爛漫、桜花咲き誇る学び舎のある八幡山での青春の日々が始まった。

富士山の麓にある小さな町から蒸気機関車が牽引する御殿場線の客車に揺られて山あいの七つのトンネルをくぐり、四つの鉄橋を渡り、車窓の景色を楽しみながら毎日胸膨らませて高校へ通った。

そんなある朝のこと、駿河小山駅から車内に乗り込むと、向かい合わせの四人席のボックス席が三席も空いていた。そこに一枚の小さな白い紙が無造作に置かれているのに気づき、私は意識してその近くに席を取った。

その紙には

《フランス語の勉強をしませんか。／毎週金曜日午後六時から／場所はカトリック御殿場教会／先生はフランス人のアンリー司祭・・・》と書いてあった。

その私が、次の週にはカトリック御殿場教会の和室の部屋にいた。新しい世界と体験を志向していたのだ。

その日、そこに集まったのは不二聖心女学院の生徒二名、御殿場市役所の男性中堅職員一名、滝ケ原の米軍駐屯地に勤務する日本人男性通訳一名、それに私の五名であった。

先生役のフランス人司祭は、とても柔和で謙遜に満ちた人だった。日本語をていねいに話した。私たちは毎週、司祭が醸し出す穏やかな雰囲気の中で楽しいレッスンを受けた。

何か月か過ぎたころ、降誕節の日がやってきた。私たちは皆信徒ではなかったがその祝祭に招かれた。そのころの私は聖書を読んだことも、教会に行ったこともなかったが、素直にこの誘いに乗った。

祝日ミサは夕刻に始まった。

私は純真な心と素直な気持ちを抱いて臨席し、教会堂の中で繰り広げられるカトリックの光景を好奇心と期待感を抱いて凝視した。

ミサは荘厳な雰囲気の中で煌びやかに進められていった。開催の儀、言葉の典礼、閉祭の儀などを興味深く見守った。

ミサは夜が更け行くころに終わった。

教会の外に出ると、富士山と箱根連山の上の天空には広大な満天の星空が開いていた。それはかつてみたこともない美の極みだった。私はその星空を仰ぎ見ながら、みち溢れる感動とともに深夜の道を家路へとたどった。

喜寿を迎えた私は、長い人生の中で事あるごとにこの情景を思い浮かべる。

その後、プロテスタントの教会でイエス・キリストの救いに与かってからは、この情景に新しい場面が加わった。一つは、讃美歌一〇三番の詩とメロディーである。

牧人ひつじを　守れるその宵
たえなるみ歌は　天よりひびきぬ
喜びたたえよ　主イエスは生まれぬ

仰げばみ空に　きらめく明星
夜昼さやかに　輝きわたれり
喜びたたえよ　主イエスは生まれぬ

また同時に新約聖書の「ルカの福音書第二章」の聖句が甦ってくる。

『すると、たちまち、そのみ使いといっしょに、天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。いと高き所に栄光が、神にあるように。地の上に平和が、御心にかなう人々にあるように。御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見てこよう」』（新改訳聖書第三版）

若き日に経験した降誕祭の情景と讃美歌と聖句が心地よく重なり合う。この三つがひとつになった理想のクリスマスが、いつも鮮やかな煌めきを放ちながら思い浮んでくる。

父への言葉

志田雅美

平成三〇年五月二八日、四年半の闘病生活の末、父が他界した。八二歳だった。

父の最期の顔はとても穏やかで「やっと楽になれた」と言わんばかりだった。心不全、腎不全、間質性肺炎、脳硬塞とたくさん病気を抱えていたので生きているほうがよほど辛かったろう。

私はまだぬくもりのある父の手を握り「父の霊があなたのみもとに行かれますように」と祈った。『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます』とみことばにあるから信仰のない父も天国に行けると信じた。

思えば厳しい父だった。上昇志向の強い物質主義者でもあった。私はそんな父が大嫌いで、ずっと逆らってきた。が、父が亡くなった瞬間、とても素直に父が見えた。父は父なりに私を愛し、善いものを与えようとしてくれていたのだ。

いよいよお別れというその時、私は棺に横たわる父に触れ、「お父さん、いってらっしゃい」と笑顔で言った。もちろん、行き先は天国だ。死が終わりではないと信じる私に涙はなかった。

それから早半年。父がいない食卓を寂しいと思いながらも、私の日常は元に戻った。母も元気を取り戻しつつある。主が私たちを慈しみ、包んでくださっているおかげだ。信仰が与えられている喜びをかみしめ、主と共に歩んでいる。

クリスマスのおきゃくさま

槇　尚子

クリスマスも近いある日、ある母親からおたずねがありました。

「娘の学校で毎週朝の時間にお母さんが絵本の読み聞かせをしているの。再来週が当番なんだけど、クリスマス絵本で何かないかしら。キリスト教を前面に出している本ではなく、その精神を感じさせるもので」というものでした。

クリスマス絵本はどこの図書館にも本屋にも山のようにあります。クリスマスカラーをふんだんに使った絵本は、眺めているだけで楽しいものです。教会ならいざ知らず、普通の小学校で一年生が楽しめるものがいいようです。

そこで勧めたのが『クリスマスのおきゃくさま』というアメリカの絵本でした。

『クリスマスのおきゃくさま』
ダイアナ・ヘンドリー作
ジョン・ロレンス絵
ふじいみきこ訳（徳間書店）

クリスマスの前の日、思いがけないお客様が次々にやってきます。遠くから近くから来る客をその家のご夫婦はみな受け入れるのです。

はじめは部屋に入れますが、到底足りません。そこで床の上や廊下や風呂場まで提供します。それでも「泊めてください」と来るのです。出窓だったり、挙げ句の果て食器棚の中だったり。狭くなるからいやだという人は誰もいません。そして不思議とそこに空間ができて収まるのです。

さて、最後に来たのは誰でしょうか。

ファンタジーですから現実に起こりえない出来事が次々と展開していきます。

クリスマスの喜びは誰のところに届けられるのでしょう。

この夫婦はどんな人も動物も受け入れました。そこに喜びがありました。

条件は何もないということ。どんな人も「入れてください」というだけでいい、それは神の国と同じです。その人が持っているものは全く関係ありません。

クリスマスは一人で過ごすよりも誰かと共に過ごしたい、これが私たちの心情です。どの教会もイブ礼拝を大事にしています。

毎年、イブ礼拝には思いがけない人が来ます。近所に住んでいるので一回のぞいてみたかった人。子供の頃教会学校に行っていたので、讃美歌が懐かしくなって来た人。教会員の家族で、いつもは反抗しているのにまあ一度だけと言って来た人。どの人も大歓迎されます。一緒に礼拝を共にします。共に祝福にあずかります。

今年も二十四日には冬のコートを着て、家族と教会に行こうと思います。

イヴ礼拝で大反省

山本披露武

かつて私は、クリスマスとは、子供の喜ぶ顔を見るためにケーキを買う日ぐらいにしか思っていませんでした。ところがその私が、ひょんなことから三浦綾子の『塩狩峠』を読む破目になり、それがきっかけで教会に行くようになったのです。教会に行ったところ驚くことばかりでした。

最初に驚いたのが祈りの姿勢です。初めて教会を訪ねた日に、牧師夫人が「お祈りしましょう」と言われたので、「十字はどのようにして切るのですか」と尋ねると「切らなくていいですよ」というのです。メノナイトという聞いたことのない教会名だし、もしかしたらインチキ教会かもと思い、ルーテル派の教会に通っている妹に電話で尋ねると「兄ちゃん、メノナイトやったら大丈夫や、異端やない」との返事で、ちょっと安心しました。

次に驚いたのが洗礼名です。受洗すれば授けていただけるものと思い、楽しみにしていたら、それが無いというのでガッカリしてしまいました。さらに驚いたのがイヴ礼拝です。当然、ご馳走がいっぱい出て、みんなで楽しく歌ったりゲームをしたりするものと思っていたのに、讃美歌とショートメッセージだけ。それでもクリスマス礼拝の当日は盛大だろうと期待していましたが、やっぱり賛美歌と説教だけ、それでおしまいというのです。

こんな寂しいクリスマスでは初めて教会に来られた人や子供たちがかわいそうだと思い、ある愛餐会の席で、「せめてイヴ礼拝のときだけでも、楽しくしませんか」と提案をしたところ、全員が賛成し、喜んでくれました。ところがその係が私に回ってきてしまったのです。慌てました。

しかし自分が言い出したのですから断るわけにはいかず、大役を引き受けることにしました。

考えたあげく、ゲームやクイズ、それに、歌を歌いながら進めるプレゼント交換などを組み入れることにしました。

大成功でした。子供たちに大受けをし、私は鼻高々でした。こうしてその翌年も翌々年もイヴ礼拝のイベント係りを任され、大張り切りで引き受けてきました。

ところが、何年か経つうちにネタが無くなってしまい、役を降してもらうことにしました。しかし、後を引き受けてくれる人が無く、その年は讃美と礼拝のみのたいへん寂しいイブ礼拝となり、係を辞退したことを後悔しました。

ところがです。私の耳に入ってきたのが「心が洗われるようなすばらしい礼拝に出席できてよかった」という、初めて来られた人の声。私はその場から逃げ出したくなるほど恥ずかしい思いをしました。新来会者や子供たちに楽しいイブ礼拝をと思った余り、礼拝よりもイベントを大事にしたことに気づかされ、大反省をしました。

始まりは赤いカニ

富岡　国広

ずっと以前に、ドキュメントのようなテレビ番組で観た赤いカニのことが、突然脳裏に浮かんだ。そのカニは確かクリスマスに因んだ名前であった。赤いカニが群をなしている場所も真赤な絵の具で鮮やかに彩られていて、思わず釘付けにされてしまった。

夥しい数の真っ赤なカニが目あての場所に大移動をしているとの解説がされていた。その光景は圧巻であった。カニは雑木林や道路などを横切り、かなりの距離を移動していく。

しかし、目あての場所に辿り着く頃は、道路を横切る際に車にひかれたり、途中で体力が尽きたりして死に絶えてしまうカニが相当数あるのではないかと想像した。

そのことから、産まれた場所に必ず帰って来ると云われる鮭の生態が思い起こされた。

鮭は産卵のために海から川へと長い距離をさかのぼるわけだが、その途中で熊の餌食になったり、傷ついて体が衰弱しきってしまい、多くは屍をさらすことになるのだ。

さらに海のプランクトンや、大地に生える草などにも目を転じてみた。それらを食物連鎖という視点からみつめると、多くの大小の生き物が子孫を残すために、はるか昔から今に至るまで、絶滅せずに、ずっと存在し続けていることがわかった。

それは、人間の世界でも言えることで、はるか昔から今に至るまでこの大自然から生活に必要なすべての物が与えられている。

そのことを、私たちはごく普通に「恵み」と言い表わしている。恵みとは、日本語大辞典には、「あわれみ、慈愛、施し」などとあった。それは一方的に相手のあわれみにより、食べ物や愛情のこもった言葉を受けるという意味になるだろう。あわれみとは受け身なのだ。そこでは、自然界にごく普通に見られるように正しい法則のもとに統制のとれた秩序そのものが存在している。

私がそこで見出したのは、主と従の関係だった。そこには最も深い意味で、すべての生けとし生けるものは、すべてをお造りになられた創造主の御手による意志と力があり、そこには必ず御目的があることに気づく。それは大きな驚きである。

『主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。』詩篇一〇四篇二四節

究極の恵みは神の愛である。

全人類への神の愛の結晶はイエス・キリストだ。

クリスマスは神の愛、イエス・キリストが私たちに与えられた日なのだ。

たった一回だけの

西山純子

高校一年の時だったかしら?雪の降るクリスマスイヴでした。

舞台では青年会の先輩たちがゴーリキーの「どん底」を上演していました。皆さん忙しい中での練習で、セリフを覚え切れない人もいました。

セリフ半ばで不意に舞台の袖に姿を消し、やがて戻ってきて朗々とセリフを続ける場面もありました。

私はライトに照らされた先輩が皆さんすてきで、軽い興奮も覚えて観ていました。

特にペーペルと言ったでしょうか?その役を演じた青年のセリフの迫力ある響きと、抑揚、胸に迫ってくるバリトン・バスの声に魅せられました。

怖い役柄のせいもあったのでしょうが、青年の人を射すような眼に、私はドキドキしました。震えました。一瞬でしたが、恋というのでしょうか、憧れというのでしょうか?少女特有のトキメキさえおぼえました。

不思議なのは、その後その青年が誰であったのか、クリスマスイヴの会が終わってから、キャロリングをしたはずなのに、その年は雪で中止になったのか、徒歩で何軒かのお宅を訪問したのか、ほとんど記憶にないのです。

そうして、その青年のことはいつの間にか忘れました。迫力ある風がドッと押し寄せて去って行った、そんな突風のような出来事であり、思い出でした。

強烈な射すような、あの眼の力は去りましたが、朗々と会場に響き渡った声だけは耳に残りました。

私が、朗読に関心を持ち、ひと頃はクラシック音楽の解説をする、ランブルという珈琲店の朗読者になりたいと憧れたのは、多分あの「どん底」で聞いた声が所以していると思います。

やがて大学生になり、私の声や話し方に関心を持ってくれた友人の一人が、勧めてくれてアナウンス、アカデミーという場で、講習を受けたのも、恐らくたった一回の「どん底」に出会い、あの声に出会ったからだと、六十年も経てから気づく、ずいぶんのん気でスローテンポな私らしい現象だと笑いがこみあげて来ました。

私が中学生から今日に至るまで、神の導きをいただいて教会に連なり、キリストの恵みの中に置いていただいているのは、人間には及ばない御力の故と確信します。

と共に、詩に、絵本に、演劇に、私の声で朗読し、つかの間でも人々の心に何かを伝えさせてくださる神の特別な、愛にみちた「私のために用いなさい」の御声をいただいているからだと感謝しています。

聖誕劇とまあちゃん

三浦喜代子

三十代半ばから四十代半ばまでちょうど十年、私は所属教会付属の保育施設で働いた。まだ少子化時代の前で、園は教会が母体であることが信頼されて、地域の子どもたちであふれかえっていた。

クリスマスは園をあげての最大の行事であった。毎年クリスマス会を目指して、秋早々から「聖誕劇」の練習が始まる。出演者はもちろん園児たちである。シナリオは聖書のクリスマスの場面を中心にしたページェントである。その年の園児たちの顔ぶれをみながらアレンジしていく。その作業は私が担当した。新しく讃美歌を入れたり、ダンスを加えたりした。

主役は何といってもマリヤとヨセフである。その人選が一仕事であった。三人の博士、羊飼い、天使たち、家畜たちなど、志願制にしたり、推薦にしたり、くじ引きにしたり、出来るだけ公平になるように知恵を絞った。

幸い、世の中がまだ神経質になっていない頃だったせいか、なんのトラブルもなく役が決まり、華やかに賑々しく当日を迎えることができた。その日は父兄たちも勇み足で集まってくる。もうひとつの楽しみは大きなプレゼントの袋が全員に配られることであった。

★まあちゃんの事

今でも忘れられない園児がいる。近所なのでいまでも時に出会うこともある。まあちゃんという。

「うちの子、変なんです」。

お母さんは教会の玄関で涙を流さんばかりに牧師である園長に訴えた。しばらく話を聞いていた園長は即座に「うちへよこしなさい。お預かりします」と中途入園を許可した。

翌日から、リス組の名札を付けたまあちゃんは年中組に登園してきた。初めての子にありがちな、母親とのしばしの別れを、泣くでもなく顔をゆがめるでもなく、自分の家のように入ってきた。

まあちゃんは一言もしゃべらなかった。

お母さんの「変なんです」はこのことであった。

家では普通にお話するという。電車の中や遠くのお店では店員さんとも話をする。ところが、少しでも顔見知りの人がいると、口は貝のようにぴたりと真一文字に閉じてしまい一言も発しない。顔は無表情で能面のようになってしまう。頑くことすらしない。ご両親の心配は並みではない。いくつかの専門家に診察した結果、「場面緘黙症」と診断された。

園ではしだいに活発になり、遊びの場にも臆することなく入っていき、走ったり飛んだりもする。しかし、どんなに話しかけても、返事をするように誘導しても、それはそれは驚くほど巧みに避けて断固として言葉は出さない。ところが、さんび歌は口パクで歌っているのだ。

どうしても理解できなかったがそのまま受け入れて、他の子どもたちも教師もまあちゃん、まあちゃんと呼んだ。彼はすっかり人気者になった。名を呼べば振り向くし、ある時は胸の名札を指さして自己アピールもした。笑顔も生まれた。

私たちは彼のために祈りを忘れなかった。

クリスマスページェントをする時期になった。まあちゃんをどうしようと教師たちは何度もひたいを寄せ合った。

「まあちゃんは、何の役がやりたいの」と尋ねると、そばにあった馬のお面を指さした。

「家畜小屋のお馬さんがいいのね」と念を押すと深くうなずいて、ひときわ高く「ヒヒーン」と声が出た。音声が出たのである。

私たちは初めて聞く声に、目を潤ませて神様に感謝した。が、さりげなく「じゃ、まあちゃんはお馬さんね。がんばって練習しましょうね」

とごく自然に振舞った。お帰りの時そっとお母さんに話すと「ありがとうございます」と涙を拭われた。

その年の「聖誕劇」はマリヤとヨセフの熱演以上にまあちゃんの「ヒヒーン」が大好評を博し、会場全体が喜びに包まれた。聖なる喜びであった。

まあちゃんの後日物語はまたの機会にしたい。

彼は今立派な青年になり、ＩＴ企業の戦士として日夜仕事に励んでいる。しかしお母さんは「うちの子、やっぱり変です」とあきれ顔で話す。が、うれしくてたまらないようである。

火の戦車

篠田一志

むかし観たイギリス映画「炎のランナー」が懐かしく思い出された。

この映画は、一九二四年のパリ・オリンピックを舞台に、走ることによって栄光を勝ち取り真のイギリス人になろうとするユダヤ人の青年と、神のために走る若きスコットランド人宣教師の実在した二人の短距離ランナーを描いている。

初めて観たときは、イギリスに金メダルをもたらした二人の陸上競技選手を中心にした人間ドラマとの印象だった。

信仰を持った後に再び観ると前回には無かった感動をうけた。二人のランナーが直接激突する場面である。

予選が日曜日に実施されることが明らかになると、若き宣教師は礼拝出席を優先して予選に出ないことを決断した。初めて観たとき、愚かな決断だと思っていたが、この決断こそ神の恵みの中に生きる信仰の証しであり、神の栄光を求める者だけができる決断だと思い直した。

『十字架の言葉は滅びに至る者には愚かであっても、救いを受ける者には神の力だ』と語る聖書の確かさ、正しさに驚いたのだ。

この映画を思い出すきっかけは、つい最近、原題の「Chariots of Fire（火の戦車の意）」の「火の戦車」が、聖書の列王記から引用されていること、預言者エリシャが、敵国アラムの軍隊に包囲され絶体絶命のとき、神様が無数の火の馬と火の戦車を援軍として送られたくだりからの引用だと知ったときだった。

知る前は、単に勝利をめざして走るランナーという以上に、自らに課した使命や理想、目標のために走る人物像を「戦車」になぞらえていると思っていた。しかし、戦車が神の救いの賜物と知ったとき、映画の中心テーマは「神の栄光を求める者の姿ではなく、「神の救い」を求める者にあるように思えてきたのだ。

すると、いままで、わたしの中にあった神の栄光を見上げて走る若き宣教師の姿が消えて、オリンピックが終わり、目的を失って挫折の中に置かれているユダヤ人の青年の姿が現れてきた。

神はいま救いを必要としている者に「火の戦車」を送ってくださり、「絶望と挫折の中に置かれている者よ、希望のメッセージを聞け」と、スクリーンからの呼びかけている声が聞こえてきた。

忘れていた映画が救いのメッセージとして甦ったのだ。

原題の出自を知った今「炎のランナー」というのは的外れの邦題に思えるのだが、久しぶりにもう一度観てみようと思った。

もうすぐ、クリスマスを迎える。神からの少し早いクリスマスプレゼントかもしれない。

ザクロのほっぺ

土筆文香

昔イスラエルにホッサイという名の泥棒がいました。両ほおに半分に割ったザクロのようなあざがあるので、首に巻いた布で隠していました。

盗みがバレてつかまりそうになると、布を取ってニヤリと笑います。あざは真っ赤で、血がはりついているようにみえました。

「わー、化け物だ！」

見た人は、おどろいて腰を抜かします。

「わっはっはっはー。オレはいま、人を食って来たんだぞう」

ホッサイが大声で言うと、たいていの人は逃げ出してしまいます。

夕暮れ時、ホッサイは荷車を引いて荒野を歩いていました。盗んだ物を売って帰るところです。

やぶの中から羊の鳴き声がしました。見ると一匹の羊がやぶにひっかかっていました。ホッサイは荷車の中に羊を投げこみました。

（今日はなんてついているんだ。今夜は羊鍋だ）

にんまりしながら歩いていると、向こうから女の子がかけてきました。

（また獲物がやってきた。あの子をだまして、人買いに売ろう）

「羊見かけなかった？　ぺぺがいなくなったの」

女の子がたずねました。

「さあ、知らないね」

ホッサイはとっさにほおをおおっていた布を取り、車の中の羊にかぶせましたが、すぐに『しまった』と思いました。あわてて手でほおを隠すと、女の子がいいました。

「かわいいほっぺ！」

「これを見て、こわいと思わないのか？」

ホッサイがたずねると、女の子は首を横に振りました。女の子は八歳で、エリサという名でした。

荷車の中から羊の鳴き声が聞こえました。エリサが荷車をのぞくと、布の下から羊が顔を出しました。

「おじさんがぺぺを見つけてくれたのね」

エリサの顔がぱっと輝きました。

「まあな。この車に乗るといい。家まで送ろう」

ホッサイはできるだけ優しい声を出しました。

「わーい。ありがとう。こんな車に乗ってみたいって前から思ってたの」

エリサは何の疑いもなく荷車に乗りこむと、ぺぺを抱きしめました。

エリサの家族は羊飼いで、場所を移動しながら羊に草を食べさせていることやぺぺを探しているうちに迷子になってしまったことをエリサは話しました。

「丘にのぼれば、家族の居場所がわかるだろう」

カタカタ　コトコト車の回る音がします。夕焼け色の空がだんだん深い藍色に変わってきました。

「母さんたちはどこにいるのかなぁ」

エリサは荷車の上できょろきょろしています。

「羊飼いたちは、夜は火をたくんだろう。それが目印だ」

ホッサイは坂道をのぼります。

「おじさんって、親切でいい人ね」

エリサはぺぺと一緒に眠ってしまいました。

ホッサイの胸はちくりと傷みました。丘を二つ超えた町に人買いがいるのです。ホッサイはそこに向かっていました。

坂道を半分ほどのぼったところであたりはまっ暗になりました。見上げると満天の星がまたたいています。澄んだ空気がヒヤリとして思わず首をすくめました。いつも首に巻いていた布をつかもうとして、さっきはずしたことに気づきました。

(今まで、この嫌なほっぺたをかくさずにエリサと話をしていたのか・・・

ホッサイは子どものころを思い出しました。

(母さんは、オレが生まれてからずっと『人前ではほおを隠していなさい』と言った。父さんから『こんな顔に生まれて、一族の恥だ』と言われ、家をとび出した。それで泥棒になった。だけど、もっと別な生き方があったんじゃないかな)

そのとき、赤い大きな星が現われ、昼間のように明るくなりました。空を見ていると、何人もの天使がとんできて、澄んだ声で言いました。

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」

エリサは立ち上がると荷車からとび降りました。

「とうとうお生まれになったのね！」

「生まれたって、だれが？」

「神様の子どもよ。そのお方は人間をほろびから救ってくださるって、父さんが言ってた。おじさん、ダビデの町、ベツレヘムに連れて行って」

「オレには関係ないよ」

「おじさんのためにも生まれてくださったのよ」

「えっ、オレのためにも・・・」

ホッサイとエリサは赤い星を目指して進みます。赤い星は家畜小屋の上に輝いていました。

ふたりが家畜小屋をそっとのぞくと、赤ちゃんが飼い葉おけの中で横になっていました。赤ちゃんはじっとホッサイを見ています。ホッサイの目から大粒の涙がこぼれました。

「オレは、これまで悪いことばかりしてきました。今日は羊を盗み、この子をだまして売るつもりでした。ごめんなさい」

そう言いかけたとき、エリサの家族が家畜小屋に入ってきたので、ホッサイの言葉を聞いたのは赤ちゃんだけでした。

「この人、ホッサイさん。やさしくてとっても親切なおじさん」

エリサが紹介しました。ホッサイはエリサの家族の一員になりました。そこには、ほっぺたのことを言う人はだれもいませんでした。

知らない時からずっと　　菊地洋子

父は音楽が好きな人で、わたしが幼い頃、よく蓄音機にシングル盤の黒いレコードをかけて聴いていたのを思い出します。

父の一番のお気に入りはマンボとかのラテン音楽でした。しかし私のために童謡やクリスマスの時期には「諸人こぞりて」「きよしこの夜」などのレコードを聴かせてくれました。

わたしも父に似たのか音楽がとても好きで、特に心に深く刻まれたのは讃美歌でした。

なぜ父が讃美歌の曲を買って聴いていたか、その後も尋ねたことはありません。祖母が神仏を大切にしていましたが、家でイエス様のお名前を耳にしたことも、聖書を見た事もありませんでした。

意味の解らないわたしは、「しゅはきませり」とは何のことか、「すくいのみこは」とは何のことか、といつも思いながら歌っていました。その他にも

諸人こぞりて／むかえまつれ／
久しく待ちにし／主はきませり／
主はきませり／主は主はきませり」
（第二讃美歌　二四六番）

「きよしこのよる／星はひかり
すくいのみ子は／まぶねのなかに
ねむりたもう／いとやすく」
（第二讃美歌　二四四番）

クリスマスに限らず、わたしはよく口ずさんでいました。解らないながらもその歌詞は、冬の夜空の様にわたしの心を澄み渡らせてくれたのです。

言葉の意味を知ったのは二九歳の時でした。

思春期に負った心の深い傷により、わたしは自分を大切に思えず、その穴の空いた心を結婚によって埋めようとしました。信じられる人が欲しかったのです。

しかしわたしの選んだ道は、さらに私を苦しめるものでした。辛く悲しい道でした。どうにもならなくなったわたしは、心の底から叫びました。

「小さい頃から、わたしを守ってくださった神様、どうか助けてください」と。

その後、長男が同級生の家族によって教会学校に導かれ、わたしも別のお母さんから誘われて、家庭集会に行くようになりました。そして聖書に触れ、讃美歌の主イエス・キリストを知るようになり、救い主として信じるようになったのです。

知らずに歌っていた讃美歌の主は、こうして私たちのところにも来てくださいました。

我が家は五人が御子の救いに導かれました。

主は、知らずに賛美していたわたしに、何十倍もの喜びを届けてくださったのです。

いっちゃんの　おはなし　　安東奈穂美

ある山の中に、広場がありました。そのまん中に　まんまるに太った　はくさいを立てたような形をした石があります。

この石は、世界で自分がいちばんすてきだと思っていました。まわりを見ても、せい高のっぽの木ばかりです。えだと　葉っぱがいっぱいで、なんだかすっきりしていないなあ、とかんじていたのです。

そんな石を、おひさまや　お月さまは、ほほえみながら見ていました。

ある日、どこからか、するどいくちばしの　大きな鳥がやってきました。鳥は、

「なんだ、これ。へんな石」

と言いながら、石をコンコンとつつきはじめました。

「何するのよ。わたしの　すてきなからだに　きずが　つくじゃない」

と、石はおこって言いました。

「なんだ、おまえ、ただの石のくせに」

「ただの　石ですって？　石ってなに？」

「え、おまえ、じぶんの　なまえも　知らないの？石だろ、おまえ」

鳥は、あきれて言いました。

そうです。石は、ずっと　山の中に　ひとりでいたので、自分が石だと知らなかったのです。

「石かあ　もっと　すてきな名前ないかしら。」
　石はひとりごとを言いました。考えてみれば、いつもひとりなので、自分が世界でいちばんすてきだと　思っていたけれど、木や鳥の名前も知らなかったのです。
「じゃあ、いっちゃん。わたし、いっちゃんって　名まえにする」
　石がいうと、鳥は、
「へえ、いっちゃん、ね。ずっと下の　川べりにも、おまえみたいな　石がいっぱいあるよ。おまえの　なかま　かもしれないな」

　なかまって、だれ、と、きこうとしたとき、もう鳥は　空高くとんで行ってしまいました。でも、いっちゃんは、とにかく自分が　いちばんすてきなのだから、それでいいと思っていました。
　何日かたって、　また　ちがう鳥がおおぜいのなかまと　とんできました。そして、いっせいにいっちゃんをつつき始めたのです。あまりの　いきおいに、いたい、とさけぶことも　できず、いっちゃんは　目をぎゅっと　つぶってがまんしました。鳥たちは、コンコン、コンコン、つついたあと、何も言わないで、さあっと　とんで行ってしまいました。
　目をあけた　いっちゃんは、自分のからだを見て、びっくりしました。あちこちに　ひびがはいり、いちばんの　お気に入りだった　やわらかい丸みのあるところが　かけているのです。
　もう、世界でいちばんすてきではなくなったと思いました。それからは、まいにちが　くるしくて　たまりませんでした。
　ある時、つよい風がふいて、大雨になりました。そして、じめんが　ぐらぐらして、　はげしく　ゆれだしました。長いあいだ、ゆれつづけて、とうとう、いっちゃんは　ごろんと　たおれて、坂道をころがりはじめたのです。
　せい高のっぽの木たち、空、くも、そして　おひさまが　いっちゃんのまわりで　ぐるぐる　して、わけがわからなく　なりました。
　ようやく気がつくと、今まで　見たこともないばしょにいました。なぜか、からだが　ふわふわするような気がして、ふと見ると、
「わわ！形がかわってる！」
　そうです。いっちゃんは、ころがり続けて、小さくてちょっとでこぼこのある石になっていたのです。

　すると、
「こんにちは。山からきたの？」
と、声がきこえました。見ると、なめらかで　おしゃれな形の石が　にこにこしていました。
「知らない」
　なぜだか、おこったような　気もちになって　いっちゃんは　こたえました。
「山のほうで、とても大きなじしんが　あったって　鳥たちにきいたのよ」
　その、つるりん石は　やさしい声で　言いました。川べの　ほかの石も、つるつるしています。いっちゃんは、前に、
「川べりにもおまえみたいな石があるよ」
と言った、鳥のことばを思い出しました。でも、（わたしみたいじゃ　ないじゃない）と思っていました。今までは、世界で　自分がいちばんすてきだと　思っていたのに、こんな石たちがいるとは　知らなかったのです。
「ほんとうは　こんな　形じゃなかったの。世界でいちばん　すてきだったんだから」
　ツンとして、いっちゃんは言いました。
「あら、あなた、とても　すてきな　形よ」
と、つるりん石は　気にさわった　ようすもなく、さっきと同じようにやさしい声で　はなしてくれました。
　いっちゃんは、なかま、とか、友だち、というものを　知らないできたので、ちょっと　くすぐったいような　気もちでした。そこで、ゆうきを出して、
「わたし、いっちゃん」
と言いました。
「すてきな　名まえがあるのね。わたしは、鳥たちには、いつも、『石』と呼ばれているだけなの。いっちゃんみたいに、名まえがあるとうれしいわ」
　いっちゃんより、もっと　おねえさんみたいなつるりん石は、そう言って　にこっとしました。

いっちゃんは、はずかしいような、からだの　おくが、じんと　するような気もちを　はじめてかんじました。そして、

「じゃ、つるっとしていて　きれいだから、『つっちゃん』はどう？」

と、思いきって　言ってみました。

「つっちゃん。いっちゃん　と　つっちゃん。いいわね。うふふ」

つっちゃんが　えがおに　なると、その　まわりが　きらきらしました。

いっちゃんも、うふふ、とわらいました。

この日は、とくべつな日です、いっちゃんが、はじめて　わらったからです。高い　空の上で、おひさまも　おつきさまも　にこにこ　ほほえんでいました。

おしまい

★事務局より

目下、次のあかし集『百花繚乱』は最終編集中です。それぞれのミニ自分史が二十篇ほど収録されます。

神の花園に育てられた一人ひとりの人生がどのような花を咲かせるでしょうか。来年の秋には一冊になって誕生できるでしょう。お祈りください。★

思い出の歌曲

佐藤晶子

私は小学校の低学年の頃、ピアノ教室に通っていた。でも、学校から帰ると外で友達と遊びたくて練習するのを怠けていたので、あまり上達しなかった。そのうちやめてしまった。しかし、ピアノを習った効果は意外なところにあった。簡単な楽譜なら読めるようになったことだ。

父の本棚に並んでいた世界の歌曲集が気になった。内緒で取り出し、開いては口ずさんでいた。

その中で心惹かれるメロディーの曲があったが歌詞が英語だったので意味がわからなかった。曲は長い間心の奥底にしまわれたままだった。

再びその歌に出会ったのは、結婚して実家を離れて住んでいたＪＲ南武線の鹿島田駅の近くの小さい古本屋だった。躊躇なく購入した。

『アメリカン・フォークソング』(永田文夫・編　成美堂出版発行)という歌集の中に、『誰も知らない私の悩み』という曲名で出ていたのだ。

歌詞は英語、曲名だけが日本語に訳されていた。この歌集にはたくさんの黒人霊歌が入っている。今も手元にあって時々歌っている。

最近、同じ曲が讃美歌第二編の二一〇番に、『わが悩み知りたもう』として収録されているのを見つけ、心が熱くなった。

かつて愛した歌を、今はキリスト者として歌っていることに、不思議な神の導きを感じている。

レイ子さんの鈴虫

島本耀子

レイ子さんは二歳の時に罹ったジフテリアの菌が目に入って、両目とも見えなくなりました。お母さんは、レイ子さんに洗濯やお掃除、女性としての身だしなみ等をきちんと教えました。レイ子さんの身なりやお化粧はしっくりと落ち着いて、誰の目にも、お世話している人の細やかな愛情が感じ取れました。

姉や妹は琴を習っていましたが、お母さんは、目の見えない娘には三味線一筋に、名人のお師匠さんから習わせました。お師匠さんは、音曲の道一筋に生きようとするレイ子さんの素直な性格が、お三味線の音にも表れていると言ってその上達を喜び、晴れて稀音家の門下に加えられました。

家には三味線、小唄、長唄のお弟子さんが大勢集まるようになり、その中には琴の先生もいました。音の世界に生きるレイ子さんは、どんなにか琴の音色に憧れていたか分かりません。レイ子さんは琴の先生に三味線を教えながら、琴を習いました。両親の亡き後、結婚したお姉さんも、ご主人が亡くなると住み慣れた家に戻ってきてくれました。

レイ子さんは盲学校には行きませんでしたが、本を読んでもらうのが大好きでした。『耳から聞く図書館』が市内にできると、大好きな小説のテープを借りて楽しみました。『耳図書』の交流会で、点字を教えてもらい、教えられた事はすぐに理解して覚えますから、カナタイプも出来ました。

耳で聞き、そっと触れて感じ取る、そのすべては「見る・知る」に繋がるのです。

神様はレイ子さんの心の目も開かせて、クリスチャンにしてくださいました。教会で歌って耳で覚えた讃美歌のメロディを、ピアノに向かって弾きこなしたときは、皆が驚きました。

『耳図書』で知り合った涼子さんが、盲人のためのキリスト教伝道図書の朗読も始めて紹介されると、レイ子さんの読書はますます増えました。

お稽古ごとにつきもののおさらい会は、仕出しのお弁当を取って、自宅のお座敷でしていました。のちには涼子さんのお姉さんもお弟子になり、皆で楽しみました。このままの暮らしがずっと続けばよいのにと、誰もが思いましたが、お姉さんが年取って亡くなると、レイ子さんは障害者自立生活支援センターに入りました。食事や入浴など、日常生活の心配はなくなりましたが、訪ねてくる人の足は遠くなりました。

障碍者の施設は交通便利な所にはありません。涼子さんの訪問も、今までの三倍は時間がかかるようになりました。それでもしばらくは、変わらず来てくれるお弟子さんがいました。

久しぶりに涼子さんが訪ねると、レイ子さんは背丈が縮んで見えましたが、嬉しそうに贈られた鈴虫の話をしました。飼育箱は丁寧に掃除して、必要な水を欠かさなかったので、鈴虫の赤ちゃんがいっぱい生まれました。そのかすかな音にレイ子さんはニッコリしました。優しいお母さんの表情です。鈴虫の好物はナス。ときどきかつお節を与えれば元気が出ます。レイ子さんはそんな説明をしながら、お弟子さんたちにも、分けてあげたと言いました。

レイ子さんは、臆病な虫たちを決して驚かせたりはしません。優しい手さぐりで餌をやります。虫たちはたちまち、レイ子さんが大好きになりました。何か用があってレイ子さんが部屋から出ていくと、皆はさびしくてひっそりしていましたが、戻ってくると大喜びで、いっせいに鳴き出したそうです。

楽しくおしゃべりのひと時を過ごして帰るとき、涼子さんは戸口にいた変な黒い虫を見つけて、手で払いのけました。ところが後に鈴虫の写真を始めて見て、あれは鈴虫だったと気が付いたのです。

レイ子さんは最後の鈴虫は巣箱ごと人にあげたそうですが、冬も近いというのに、中の何匹かはカーテンの陰にでも隠れていたのでしょうか。

それから間もなく、いつものようなレイ子さんの電話が来なくなりました。「また来てね」と、笑ってさよならをしたのに、涼子さんが掛けても受話器を取ってくれません。気になって事務所に電話をすると、職員さんは会えない状態になっていると言いました。

一人閉じこもっているレイ子さんを見守っているのは、鈴虫だけだったのでしょうか。身内でもない涼子さんが押しかけて行くわけには参りません。

神さまは、見えない人に見える世界を、見える人には見えない世界を、見せてくださいました。

いつか、天国でまた会えるでしょう。

舞台に立つ

長谷川和子

「終わった、終わった」さいたま芸術劇場を背に駅に向かっている間、小声で言いながら足早に歩いた。「終わったね」、「頑張ったね」と道々言葉を交わしたことがないが、同じ舞台に立った者たちが「御苦労様」とねぎらいの言葉をかけながら追い越して行く。本当に終わったのだ。打上げの慰労会には出席せず、家に帰りたい一心で駅の階段を駆け上った。

埼京線与野本町から大宮へ、高崎線に乗り換え桶川駅に着いたときは暗くなっていた。

何とかバスに間に合った。ベンチに座って、迎えの自家用車が次から次へと止まり、吸い込まれるように乗り込む人々を眺めながら、生前、夫もこのように迎えに来てくれたことを思い出した。

モリエールの喜劇「病は気から」を原作としたノゾエ征爾氏脚本・演出の大群衆劇(約八〇〇人)が九月二九日から十月八日に渡って月組太陽組の公演が彩の国さいたま劇芸術劇場で行われた。

二年前蜷川(にながわ)幸雄氏原案「一万人ゴールドシアター」がノゾエ氏の脚本演出により、さいたまスーパーアリーナで六〇歳以上一六〇〇人の高齢者による大群衆劇が行われた。友人の誘いと興味もあって参加したのであった。

その後ゴールド・アーツクラブが発足した。

じっと家にいると、一年前に召された夫のことを思っては涙する日々になってしまう。

（これでは私まで駄目になってしまう、外に出なくては）と、参加することにした。

太陽組四〇〇人と共に八月初旬より稽古に明け暮れる日々が続いた。

私の役は家政婦トフトである。セリフは御主人のアルガンに向かって「気づいていないのか、いよいよ間抜けにもほどがあるな」であった。

トフトは女性だのだが、男性のような言い方なので頭に入らず、声質はどうなのか、台本を何回も聞いて声に出して覚えようとするのだがしっくりせず、悩んだ末に思い切ってノゾエ氏に伺った。

「女の人でも心の中でそのように思う事あるでしょう」と言われ、（そのように思ったことはない）と心の中で反発したがすぐに演出家の意向を察し、お腹から声を出すように練習をした。

完璧に覚えた頃「セリフの後にスカタンを入れましょう」と言われた。「スカタンって、どういう意味なのか」、仲間に聞いたが「聞いたことがない」と言う。

帰宅後早速辞書を開いた。相手を見下すような意味だと知り、「スカタン」と紙に書いて台所や洗面所に貼った。なかなか覚えられず、発声もしにくい。歳のせいなのかと愕然とした。

当初はグループに分かれ、主に歌、踊りの練習であったが、九月二五日以降は全員での通しの稽古に入った。その頃には何とかセリフが言えるようになっていた。

九月三〇日、初日公演には息子と娘が観に来てくれ、その後の三回の公演に友人たちが一五名観覧してくれた。

「老人たちとは思えないほどパワフルで生き生きと役に成り切っていて、こっちが元気を貰った」とは、全員の感想であった。中には「面白くて口角が上がりっぱなし、いつ口角を下げようかなと思ったわ」、「声が出ていたし長谷川さんは百歳まで生きると思ったよ」、「おとなしいあなたが舞台に上がるのが理解できなかった。でも今日観て皆の中に溶け込んでやっていたのでびっくり、よかったよ」などユニークな感想に笑い、満面の笑みで話す友に感謝した。

「終わったのだ」と口にしたとき、よく体がもったと思った。猛暑にもめげず仲間の迫力に圧倒されながらも稽古に通うことができたのは、ノゾエ氏、スタッフたち、裏方さんたちの劇を成功させたいと言う熱意によるものであった。神に感謝の祈りを捧げた。

ふと、夫も元気になっていく私を、目を細めて喜んでいるのではないかと思い、悲しみがほんの少し薄らいでいくのを感じた。

★災禍の多かった今夏を乗り越えて、半年ぶりにお届けでき、喜びと感謝充満！栄光主にあれ！

日本クリスチャン・ペンクラブ（ＪＣＰ）の自己紹介

起源は、１９５２年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後１９６３年に満江巌氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。現在は２つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。

活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最近では関東が『山川草木』**（在庫僅少）**、関西が『種を蒔く４号』を発行しました。

また Web 上にホームページを開いています。（ＵＲＬ　http://jcp.daa.jp/　）

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはＨＰのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はＨＰに掲載します。なお本誌「文は信なり」は関東ブロックが年２回ほど発行しています。（頒価 100 円）。　ＨＰにも掲載します。